



谷崎潤一郎文庫

お国と五平
お艶殺し 本牧夜話
お才と巳之介
他四篇

六興出版



谷崎潤一郎文庫

八八〇円

第六卷 お艶殺し・お国と五平他

昭和四十八年八月二十日 発行

著者 谷崎潤一郎

発行者 吉川文子

印刷 大日本法令印刷

製本 手塚製本

発行所 六興出版

東京都文京区水道二一九―二

郵便番号 一一二

電話 〇三(九四三)三四三一

振替 東京九二四四八

© 1973 MATSUKO TANIZAKI, Printed in Japan.

落丁・乱丁の本はお取り替え致します

0393-02406-9216

目次

恋を知る頃	三
お艶殺し	三〇
お才と巳之介	八
お国と五平	一七
永遠の偶像	一九
愛すればこそ	二三
愛なき人々	三〇

本
牧
夜
話

注
解

解
說

監
修

谷
崎
松
子
野
村
尚
吾

三
四
三

三
六
七

三
五
七

恋を知る頃

三幕

人物

伸太郎

日本橋馬喰町辺の木綿問屋の子

下総屋三右衛門

伸太郎の父

お政

伸太郎の母

おすみ

柳橋待合香川の主婦、三右衛門の妾

おきん

おすみの娘

利三郎

下総屋の手代

おしげ

伸太郎の乳母

お寅

下総屋の小間使

お初

下総屋の小間使

お花

香川の女中

外に伸太郎の学友数人

時——明治二十年頃

所——第一幕 浅草代地

第二、第三幕 日本橋馬喰町

第一幕

待合香川の内部。舞台左手に六疊ほどの一と間——其処が帳場になっている。部屋は左側の奥に添うて帳場格子を置き、傍の柱にいろいろの通帳、状紙などを掛け、その真上、天井に近く神棚を設ける。部屋の後ろは土蔵に続き、正面の観音開きの左に、鬱金の袋に包んだ三味線二た棹、右に茶箆箆。茶箆箆の上に鏡台、置時計を置き、その前に長火鉢が、後ろ向きに据えてある。部屋の右側は障子、その外は廊下を隔てて風呂場の入口の板戸に對す。廊下の奥に梯子段が正面を向いてかかっている。春の彼岸の中日の午後二時ごろ。
(と書きに用うる前後左右縦横等は、特に指定せざる限り、すべて正面の観客を標準とす)

第一節

おすみ おきん お花

おすみ、實際は三十七八なれど、三十前後にしか見えぬ艶なる年増。漸く今、朝飯を済ませたところらしく、独り長火鉢に靠れて新聞を読んでいたが、やがてそれを膝に投げ、煙管に煙草を詰めながら、甲高く呼ぶ。

おすみ おきんちゃん、どうしたの。まだ見付からないの

かい。

おきん いいえ、わかってよ。おッ母さんこれじゃない

の。(土蔵の中より答えながら、重箱を持って出で来り、観音開きの前に立つ。母に似て更に美しく艶なる女。年齢十七歳。背高く、顔しまり、眼から鼻へ抜けそうな伶俐な容貌のため、却って二つ三つ老けて見える。きびきびした言葉遣い、活発な举止、どこかにお転婆らしきところあり。髪を島田に結び、襟のかかった縞お召の袷を着る。素足)

おすみ ああそれ、それ。それへお萩が幾つぐらい這入るだろうね。

おきん そうだね。(重箱の蓋を開き、ちょっと目分量で勘定する)内のは大きいから、そんなに沢山は這入らないわ。

おすみ お前御苦労だが、それを持って、ちよいと一と走り馬喰町まで行つて来ておくれ。今の内なら多分旦那もいらッしやるよ。お口汚しでございましょうが、折角内で拵えましたからッて……母が伺うはずでございまずけれど、二三日加減が悪クッて臥せておりますから

とか何とか云つてね。

おきん 今日はあたし嫌よ。

おすみ なぜさ。

おきん なぜでも。……誰か女中をお遣なさいな。

おすみ いつも馬喰町だと喜んで行くくせに、可笑しな人だね。女中を遣るッたつて、お信はさっき蔵前へ持たしてやったし、お花は手が空かないし、お前が行つてくれなきゃ、外に使いがありませんよ。

おきん だからもうじきお信が帰つて来たら、持たしてやればいいじゃありませんか。(重箱を傍に置いて、長火鉢の横へ崩れかかるように立膝して据わる)

おすみ それでもいいけれど、お前これから何処かへ出掛けるのかい。今夜は旦那もいらッしやるし、内にいた方がいいだろう。

おきん 誰も出掛けると云やしないわ。……あたし、実は少しおッ母さんに話があるの。今日は人もいないしするから、丁度いい折だと思つて。

おすみ またこの間の話かい。

おきん ええ、まあそうよ。今夜旦那がいらッしやるなら、ぜひおッ母さんから相談してもらいたいと思うの。

おすみ お前も分らないね。あの話はこの間云った通りだから、今持ち出しちゃ工合が悪いんだよ。おッ母さんの方だっているいろいろ都合があるんだから、ちッとは考えられなくっちゃ。(ぼんぼんと、煙管を火鉢の角へはたいて投り出すと、右の手で猫板に頬杖をつく) お前だって、今年はまだ十七じゃないか。何も今すぐ嫁に行こうというのじゃなし、旦那もあらかた承知していらっしゃるんだから、あんまりせつかない方がいいだろうと思う。

おきん おッ母さんの方にどんな都合があるか知らないけれど、あたしの方にも都合があるの。

おすみ 生意気なことをお云いでないよ。お前に何の都合があるんだい。ほんとに、お前ぐらい親子の情愛の薄い人間はない。いくら榮耀榮華がしたいからって、親の傍にいないのが、そんなに嫌なものかね。馬喰町へ引き取られれば、なるほど大家のお嬢様にや違いないけれど、ああいう堅気の大店にはなかなかやかしい仕きたりがある、とても内にいるような気楽な訳には行きませんよ。諷だと思ふなら、まあために二三日行って御覧。一人息子の伸太郎さんはいるし、奉公人は多勢だし、お

前のような自堕落な女に、半日と辛抱はできやしないから。お上さんはああいう如才ない人だから、そりゃ口では、「おきんを引き取ってやりたい」の何のって云っているものの、何がアテになるもんかね。また旦那だってそうさ、いくら主人の威光でも、妾の産んだ子を連れて来て、すぐと仲間さん同様にさせちゃ内のしめしがつかないから、当分小間使いと一緒に働かせるくらいが関の山さ。子供のくせにお前は一体焦り過ぎるよ。嫁に行くまでは、別段内の子でいたって差支えないんだし、一日も遅い方が私のためにもなるのだから、そこをよく考えておくれな。

おきん おッ母さん、あたしや何も、楽がしたいからって頼むんじゃないのよ。どうせ引き取られるなら、遅かれ早かれ同じことだから……(右手を懐に入れ、左手にて同じく猫板へ頬杖をつき、睨み返すように母の顔を見る)

おすみ それが同じことじゃないんだってば。実のところ、私の方でお前でも養育していなければ、そうそう旦那から引き出す訳に行かないから、此方の魂胆が十分狂って来るじゃないか。内のためだと思つたら、お前だっ

てそんな不人情は云えないだろうがね。どうも私や、お前に男でもできたのじゃないかと思う。

おきん 冗談にもそんなことを云ってもらっちゃ困りますよ。(冷然たる調子)

おすみ (次第に激して来る) そんなら何も、お前のように急ぐ道理がないじゃないか。誰かお前に入れ智慧をする奴があるんだろう。

おきん 入れ知恵なんかされるあたしじゃなくってよ。――

――おッ母さんにそんなことを云われるにつけても、あたしや内の稼業が嫌で嫌でしょうがないの。一日だって、こんな商売を見ているのは嫌だわ。それよりか、早く堅気な内へ引き取られて、小間使いでも何でもいいから、キチンとした暮らしをして見たいの。籍なんぞ孰方にあってもかまわないわ。

おすみ へん、どの面下げて、お前にそんな立派な口がきけるのだい。ちッと自分の不始末の行跡を見るがいいや。

――あんまり親を馬鹿におしでない。

おきん だからいいわよ。どうしてもおッ母さんが承知してくれなけりゃ、あたしの方にも考えがありますから。

(つゝんとして母の傍を去り、左方の帳場の机の前に据わ

って、何か巻紙へ徒ら書きをしながら) あたしや、今までにも随分内のためになったつもりなんだから、このくらしいことを聴いてくれてもいいと思うわ。人のことを男があるの何のと云うけれど、おッ母さんだって馬喰町へ知れたら困ることがありはしくって? もしもあたしが意地悪く出たら、どうするつもりなのかしら。

おすみ (やや不安の眼つき) お前は親を強請るつもりなのかい。大それた娘もあるもんだね。そんな真似をすりゃ、私ばかりかお前だって立ち行かなくなるんだよ。

おきん ええ、そりやおッ母さんにばかり苦勞をさせやしませんとも。

おすみ 勝手にしやがれ。(強く云い放ちたれど、なお不安の表情にて、暫らく無言のまま相對している)

お花、湯殿の戸を開け、襦がけて両手の先から湯氣を出しながら、廊下に現れる。

おはな (襦を外して障子際に畏まる) おかみさん、お風呂

呂が沸きましたがお召しになりませんか。

おすみ そうさね。(茶簞の上の置時計を顧る) まだ二時半だね。私やもう少し後にしよう。

おきん そんならあたし、先へ這入るわ。(立ち上がって、

衣類を帳場に脱ぎ棄てて、長襦袢一枚になる)

おすみ (お花に向い) それからね、お信が帰って来たら、このお重へお萩を入れて、馬喰町へ届けるように左様云っておくれ。

おはな はい、畏まりました。(重箱を受け取って座敷を通り抜け、左方の襖より去る)

おきん (風呂場の入口に立ち、廊下越しに部屋の方を振り返って) おッ母さん、今の話はよく考えておいて下さいな。もうこれっきり頼みませんから。

おすみ 知らないよ。どうでも勝手にするがいいさ。お前のような奴は、あたしの子だとは思わないから。

おきん ふふん。(と嘲けるように鼻で笑い、湯殿へ這入って、中からびしりと板戸を締める)

第二節

おすみ 三右衛門 利三郎

三右衛門、利三郎、左の襖を開けて部屋に這入る。三右衛門は五十二歳の太った男。柔和な容貌。老舗の旦那らしい、渋い服装。利三郎は二十七歳の体格の立派な、少しく苦味走った美男。髪を綺麗に分け、鉄無地の琥珀の羽織に地味な結城の袴を着、お召の前掛を締めている。右の手

に土産の折を提げて、部屋に這入るとおきんの脱ぎ棄てた衣類に眼を着け、わざとその傍へ据わる。

おすみ おや、いらっしやいまし。大そうお早いんですね。(自分の席を三右衛門に譲り、おきんの衣類を蔵の中へ投げ込んで、かいがいしく茶を入れ、菓子を出しなごする)

三右衛門 ああ、くたびれた。(伸びをして、どしんと臂餅を舂くように据わる)

おすみ (利三郎に煙草盆を与えながら) 利三どん、今日は旦那のお供ですか。

利三郎 へえ、どうも御無沙汰致しました。今日はお彼岸のお寺参りで、今戸まで行って参りました。

おすみ (長火鉢の横へ据わる) ああそう。お天気がよくって結構でしたね。こんなに暖かじゃ、そろそろお花見に間ありませんね。

利三郎 左様でございますな。もう四五日立ったら上野あたりはぼつぼつ咲き始めるでございましょう。あ、それからこれはおかみさんにお土産。(と折を渡す)

おすみ まあ何ですかありがとう。(折を手にかけて見る) おや、それじゃ山谷へお廻りなすったの。久々で重箱の

鰻^{うなぎ}が戴^{かぶり}けますよ。ほんとにありがとう。(折を茶籠^{ちやろう}笥^この上に載^のせる)

三右衛門 鰻^{うなぎ}を喰^くいたさに大廻^{おほまわ}りをして、くたびれたこと、くたびれたこと。どうも春先^{はるのきり}は、天氣^{てんき}がいいと埃^{ほこり}が立^たつてかなわない。(手拭^{てぬぐい}を出^でして顔^{かほ}を撫^なでる) もう風呂呂^{ふろよ}が沸^わいているんだな。

おすみ ええ、たつた今^{いま}おきんが這^{はい}入^いったところですよ。こんなにも早くいらっしやると知^しれたら、誰^{たれ}も入^いれずにおきましたつけ。

三右衛門 彼奴^{あいつ}は長湯^{ながゆ}だから、待^{まち}っていたら容易^{やす}なことじゃない。どれ顔^{かほ}だけでも洗^{せん}つて来^こよう。(立ち上^あがつて、廊下^{らふだ}から湯殿^{ゆでん}の戸^{かど}をあけ、中^{なかつ}を覗^{のぞ}き込む。その隙間^{すきま}から湯氣^{ゆけ}が廊下^{らふだ}に洩^もれて来る)

おきんの声 (風呂場^{ふろば}の中より) おや、御免^{ごめん}下さいまし。何時^{いづい}いらつしたんですの。

三右衛門 今来^{いま}たんだよ。顔^{かほ}を洗^{せん}うんだから、一杯^{いっぱい}汲^くんでおくれ。

おきんの声 あたしもうすぐ上^あがりますわ。

三右衛門 お前^{まへ}のもうすぐは何時^{いづい}のことだかアテになるもんか、まあいいから、半日^{はんじつ}でも一日^{いちじつ}でもゆっくり漬^ひかつ

ているがいい。

おきんの声 あら随分^{ずいぶん}よ。おほほほは。

三右衛門湯殿^{ゆでん}の戸^{かど}を締^しめて中に這^{はい}入^いる。

第三節

おすみ 利三郎 三右衛門 おきん

利三郎 ちよいと御免^{ごめん}下さい。(腰^{こし}を屈^かめておすみの前^{まへ}を通^とり、廊下^{らふだ}に出^でて板戸^{いたど}の前^{まへ}に両手^{りやうて}をつき、わざと高調子^{こうてうし}に) ええ、旦那^{だんな}。

三右衛門の声 (風呂場^{ふろば}より) 何^{なん}だ。

利三郎 私^{わたくし}はお先^{まづ}へ御免^{ごめん}を蒙^{こう}りますが、お店^{みせ}へ御用^{ごよう}はございせんか。

三右衛門の声 ああ、どうも今日は御苦勞^{ごくろう}だった。別に用事^{ようじ}はないが、まあ御膳^{ごぜん}でも喰^たべて行^いったらよからう。

利三郎 いえ、どう致^{いた}しまして、もう今日は十分に戴^{かぶり}きまして、まだお腹^{なか}が一杯^{いっぱい}でございます。

おすみ (火鉢^{かばち}の傍^{そば}に据^すわったまま、声^{こゑ}をかける) でもまあ利三郎^{りさぶろう}どん、いいじゃありませんか。一とッ風呂^{ふろ}浴^{よく}びてゆっくりしてったら。

利三郎 へえ、ありがとうございます。(また一段高調子^{こうてうし})

になる) おきんちゃん、どうぞ御ゆっくり。今日はお目にかかりませんが、これで御免を蒙ります。

おきんの声 (冴え冴えした調子) あらそう、それじゃさようなら。

利三郎 (お金の挨拶を聞くと、部屋に戻って、おすみの前に畏まる) や、どうもお邪魔致しました。

おすみ まあ、利三どん。いいからもっとゆっくりしておいでなさいな。

利三郎 折角でございますが、いずれまた……

おすみ (立とうとする利三郎の手頸を捕えて) まあさ、そんなに世話を焼かせるものじゃないッたら。

利三郎迷惑そうに控える。

おすみ ほんとに久し振りなんだから、用がなかったら遊んで行って下さいよ。旦那もお前さんのことは、若いに似合わず店中で一番役に立つて、そりゃいつも褒めていらっしやるんですよ。伸太郎さんはまだあの通りの子供だし、この上ともお前さんが骨を折って、せいぜい旦那の片腕になって下さらなくちゃ、お店の方もお困りでしょうからねえ。

おきん (湯上がりの体へ長襦袢を纏いつつ手拭を口に咬

え、風呂から上がって、つかつかと部屋の中へ這入り、母と利三郎との間に立つ。水の滴るような艶なる姿) おッ母さん、あたしの着物は何処へやって?

おすみ 蔵の中にあるだろう。

おきん そう……利三どん、ちょいと御免なさいよ。

(すぐに着物を着ようとはせず、茶簞笥の上から鏡台を下ろして其処に据え、長襦袢のままうずくまって化粧を始める。その様子を利三郎はまじまじと眺めている)

三右衛門 (風呂場の戸を半ば開けて、裸体の上半身を廊下に出す) おい、誰でもいいから、ちょいと背中を流してくれ。

おすみ おや、あなたお湯へお這入りになったの。

三右衛門 うむ、おきんが珍しく氣を利かして、早く上がってくれたから。

おすみ それじゃあたしが流しましょう。……利三どん、じきに旦那がお上がりになりますから、ほんとにゆっくりして行ってね。

利三郎 どうもとんだ御厄介になります。

おすみ、着物の裾をからけて風呂場に行く。

第四節

おきん 利三郎

おきん (化粧をしながら、小声にて) 利三どん、お前随分だね。たまに來たのに帰る帰るって、それほど私が嫌なのかい。

利三郎 そんな嫌味を云うもんじゃないぜ。あんまりぐずぐずしていると、却ってお上さんに気取られるから、わざとああ云ったのさ。

おきん 人がお湯へ這入っていて知らなけりや、会いもしないで帰ろうなんて、随分薄情な話さ。あたしや、体もろくろく洗わないで飛び出して來たんだよ。

利三郎 湯殿にいたって知れないことがあるものか。話声ぐらい聞えたらうに悠々と長湯をしているから、わざと挨拶に行つてやつたんだ。そんなことを云うなら己は帰るぜ。(煙草入れを腰にさして立ち上がる)

おきん あれ、利三どん、(男の前掛を掴み、無理に据わらせる) ちつと話があるんだから、まあ怒らないで居ておくれ。

利三郎 強つて歸りたかないけれど、お前があんまり解ら

ないからさ。

おきん あたし、いよいよ近々に馬喰町へ引き取られるの。実は今日ね、少し悪かったけれど、お母さんをおどかしておいたから、大概うまく行きそうなのよ。そうしたら朝から晩まで毎日お前の顔が見られるわね。お前の方じゃ御迷惑かも知れないけれど……

利三郎 (驚いた様子にて膝を詰め寄せる) おきんちゃん、お前本当に私のことを思つて馬喰町へ行くのかい。

おきん お前に会いたくなかつたら、誰が酔興にあんな窮屈な所へ行くものかね。今のようにお互いに離れていちゃ、会うといつても二日おきか三日おきだし、それもほんの一時間か二時間なもの、あたしや、まどろっかしくつて、懐れたくつて、しょうがないよ。それに第一、人の目を盗んで、お前が道楽でもしていやしいかと思うと、心配で心配でならないから……

利三郎 その心配は此方でする事だ。馬喰町へ引き取られた日にや、お前は仮りにも大家のお嬢様。その時になつて棄てられたつて、奉公人の悲しさには、主人の娘へ手も足も出されやしないだろう。ほんとにおきんちゃん、浮気をすると承知しないぜ。(襦袢の上より女の膝を抑

えていつまでも抓つかっている

おきん 抓るならたんとお抓りよ。(抓られながら、両手を頭に伸ばして、平気で鬢びんの恰好かつこうを直している) そんなに私を疑うぐるなら、証拠しやうこを見せて上げようか。

利三郎 (漸ようやく手を放す) どんなに証拠しやうこを見せたって、変心すればそれまでよ。

おきん いいえ、これは極ごくく内証ないしやうだけど、お前が聞いたら、きつと安心することなの。

利三郎 何だい、それは。

おきん お母さんと私あたしの外には、世間で知らないことなんだから、ほんとに人に喋しゃべ舌しやべられちゃ困るのよ。

利三郎 大丈夫だ。

おきん (低ささやく囁ささや) 実はね、利三どん。あたしや旦那の子じゃないんだよ。

利三郎 えッ、そんなら、一体誰の子なんだ。

おきん (利三郎の耳元に口を寄せて、ひそひそと告げる) ね、黙もくっていて下さいよ。

利三郎 うむ…… (急に不快な顔つきをして鬱ふさぎ込む)

おきん 利三どん、あたしやお前が可愛いばかりに、とんだことを云いってしまった。何卒どうか愛憎あいそをつかさないでおく

んなさいよ。(媚こびるようにニッコリ笑って、着物を取りに蔵に這入る)

利三郎は腕組みして考え込んでしまう。

第二幕

下給屋の奥の間、舞台の右手に母屋ははやの座敷があつて、左方の裏庭に臨む。庭の後ろは建仁寺の塀へいを開ひらけ、やや左手に木戸口が付いている。木戸口より更に左、庭の隅の方に満開の桜が二三本植わっている。座敷の正面の縁側から、飛石が桜の植え込みの間を分けて木戸口に続く。

座敷は主婦のお政が小間使いなどと針仕事をする所。あまり新しい普請ふしんではなく、柱、縁側の板の色など、いかにも旧家のそれらしくてかかと拭き込んだのである。部屋はやの後ろは腰張りのある壁、右はいい加減古びた二枚の唐紙からかみで割られ、庭に面する左方と前方とは中硝子の障子を掛け放つ。子供の徒らどもと見えて、壁や唐紙や障子のところどころに、落書きがあつたり、穴が開いたりしている。座敷の中央に大きな長火鉢が縦に置いてある。四月の下旬の午後、うらうらとした眠ねそうな日が、障子や庭に照り輝く。

第一節

三右衛門 お政 お寅 お初

お政、五十恰好のでつぷり太った女。長火鉢の右に据わり、くけ台、裁板、反物の切れなどを前に置いて、しきりとこてを炙っている。お政の右に、前方へ半円形をなして、お寅とお初とが居並び、裁縫をしている。末座のお初は半分体を正面の縁へ乗り出し、敷居際に据わりながら、開け放った障子に背を靠せかけ、左向きに俯向いた姿勢を取る。お寅もお初も年配は二十歳前後。

おまさ お初や、其処の障子を締めておくれ。あんまりきらきらして上気せるようだ。

おはつ ほんとにお暖かでございますね。(立ち上がって、左の縁側の障子を締めて来る) 今日はお仕事をしておりますと、何だか眠くなつて参りますよ。

おまさ お前達を連れて一遍お花見に行こうかね。伸太郎が行きたがつて、毎日せびつて困るから。

おとら お店の人達は、この間多勢で出かけたんでございまして、利三どんでも、庄どんでも、みんな真紅に酔払つて、踊りをおどりながら帰つて参りましたっけ。

おはつ 男は羨ましいわねえ。

三右衛門登場。

三右衛門 お政いるか。(声を掛けながら、右の襖を開けて、忙しそうに這入つて来る)

おまさ 何か御用でございますか。

三右衛門 着換えの襦袢を出してくれ。体がねばねばして気持ちが悪い。(懷から手拭を出して、腋の下の汗を拭く) 今日はいやに暖かいな。馬鹿に手足のだるい日だ。
おまさ お寅、六畳の簞笥の二番目の引出しに、旦那のお襦袢が這入っているから、持つて来ておくれ。

おとら 畏まりました。(襖より去る)

おまさ あなた。今日お澄さんが、おきんを伴れて来るとかいふ話じゃありませんか。

三右衛門 (縁側に佇み、両手を背中に組んで庭を眺めつつ) うむ。何でも今日は日が吉いから、連れて来ると云つたっけ。

お寅 襦袢を持って来る。

三右衛門 (座敷へ上がり、お寅の方へ背中を向けて着物を脱ぎ、襦袢を着換えさせてもらいながら) お澄も承知しているのだから、連れて来たら当分みんなと一緒に仕事でもさせておくさ。今までが今までだから、ちつと堅